―探求・川にちなんだ万葉集の歌―

# 万葉の川心　第3回

業務部　舩田　園子

## 多摩川に曝す手作りさらさらに　何そこの児のここだ愛しき

右の一首は、武蔵国の歌　（巻第十四「東歌」三三七三番歌）

「愛しい」と思う気持ちをこんなに真直に言われたら、今の女性たちなら何と受け答えるだろうか。その歌と同じ程の色艶と大胆さで切り返したり、躱したり、それが絵になり、歌となる万葉時代の、何とも羨ましいような相聞往来は東歌にも数多く見られる。

これは男の歌である。多摩川にさらさら曝す布のように、さらにさらに何でこの娘がこんなにも、かわいくってたまらないのか。「この児」という現実感ある表現に、「手作り（の布）を水の流れにさらす」という手の感触、布の量感を伴って、目の前に抱きながら、さらにつのっていく想いを直截に歌っている。こんなにおおっぴらでありながら、しかも格調を感じさせるのは、その背景に万葉のおおらかな生活があるからである。

ここ多摩川沿いには先進技術をもっている高麗系渡来人が住んでいて、彼らが織物作りを伝達したことによって、布の産地となっていったようである。中流域の「砧」の地名はこのことを今に伝えており、「調布」の地名が租税の「調」として布を納めたことに由来しているのはよく言われている。布を織り、そしてこれを川にさらすのは女性の仕事であった。上二句で多摩川に布を広げる乙女たちが浮かんでくる。彼女たちもまたこの歌を歌いながら仕事に勤しんだことだろう。そう考えると、男が今抱いている女への愛しさは、今さらしている布への女たちの想いに通じているのではないだろうか。自分たちが織った布は宮廷に調として納められる。手を離れていく織物への愛着か、それを纏う方への想いなのか、いずれにしてもこの歌は多くの男女に愛されたことだろう。

また、古代人は愛しくて胸が痛むことをかなしいと言った。現在ではせつないと言うところであろうか。愛しさと悲しさが同義というのは、決して古い時代だけのことではないように思う。

この歌が選ばれた一番の理由というと、これは歌の意でなく耳に入る音の響きにあることも付け加えたい。「サラステヅクリサラサラニ」と流れるような序詞の後、「コノココノココダカナシキ」とつまったような音色が、胸にせき上げるやり場のない想いを醸し出している。

多摩川は、上流の奥多摩から東京湾に至るまで様々な表情を見せ、人々が集まる憩いの場所となっている。休日になるとお弁当をもった家族づれなどでにぎわう河原を、東歌を思って見ると、白い流れが今も遠い万葉をつないでいるように思われてくる。